

国内経済情勢

概観

輸入の増勢から、貿易収支のかなりの逆調が続いている。需要の堅調を映じて、鉄工業生産が引き続き相当なテンポで増加しているためである。商品市況はなお堅調であるが、騰勢を続けてきた鉄鋼、繊維などは、このところ反落商状となっている。これは主として、生産の大幅増大などを背景とするものである。

こうした情勢に対処して、本行は預金準備率を引き上げ、引締め方針を明確にした。その後の動きをみると、産業界には先行き若干の警戒感が生じてはいるものの、なお模様ながめの気分が強く、生産、投資態度などについて具体的な影響はみられない。金融機関の貸出態度には、慎重化の気配も台頭しているが、はっきりした形で引締めに転じたとはまだいいがたい。

商品市況なお堅調ながら、鉄鋼、繊維は生産の行き過ぎなどから反落

商況の基調は、需要の増大にささえられて、なお堅調であることに変わりない。とくに紙・パルプ、化学薬品などでは、需給ひっ迫を映じて、市況は一段と堅調の度を加えている。もっとも、11月後半から12月にかけて、鉄鋼、繊維の市況に反落がみられるほか、非鉄の一部なども若干弱含みとなっている。

繊維市況の軟化には、そ毛糸にみられるようにこれまでの人気化の反動もあるが、根本は、このところ増産傾向が続いているためである。これに、天候温暖で末端実需が期待ほど伸びていないことも加わって、2次製品の値くずれが生じてい

る。鉄鋼の反落も、建設部門や末端問屋の積極的な買付けが一巡したことによる面もあるが、粗鋼操短の取止めなどから生産が急増していることが大きな背景をなしている。鉛、亜鉛などが目先弱含みであるのは、このところ続いてきた騰勢の反動といった性格が濃い。

11月の本行卸売物価は、0.3%の上昇となった。もっとも下旬には、鉄鋼、繊維の軟化を映じて0.1%の微落となっている。11月の消費者物価(東京)は、生鮮食料品の値下がり为主因に月中-0.1%と微落したが、季節商品を除けば+0.4%と続騰している。

輸入の増勢から国際収支の悪化続く

11月の外国為替収支は、従来からの貿易外赤字に加え、貿易収支も引き続きかなりの逆調となった模様である。このため、長期資本の黒字は若干増加したものの、総合勘定では11百万ドルの赤字となった。

11月の輸出は、通関ベースで前年比+17%と引き続き好調である。品目をみると、依然、船舶、機械をはじめ重化学工業品が伸びている。先行指標でみても、この傾向は当分続くと思われる。ただ最近、内需の増大や国内市況の堅調を背景に、輸出余力ないし意欲の面で若干懸念すべき動きがみられているが、引締め政策の浸透によって、今後それがどう変わってゆくか注目される。

輸入は、11月も通関ベースで前年比+43%と、高水準であり、季節調整後の計数では前月比若干の減少となっているが、ならしてみると著しい増勢が続いている。ほとんどすべての商品が増加しているが、石油、くず鉄など原燃料のほか、鉄鉄、非鉄、化学薬品など製品、半製品輸入の増勢

が続いていることが注目される。輸入原材料在庫は、生産増から総じて減少ぎみとなっており、生産の増勢が鈍化しない限り、輸入の増加は改まらないとみられる。現に、先行指標をみても、輸入の増勢は強い。

強気の生産傾向続く

鋳工業生産(季節調整済み)は、9月+2.8%、10月+1.6%とかなりのテンポでふえたあと、11月も速報で+1.0%と、引き続き堅調に推移している。11月には、一般資本財が前月減少の反動もあって、電力や自動車、中小企業等向けの設備機械、建築関係機械などを中心に大幅の増加をみたほか、冷蔵庫、テレビなど耐久消費財もかなり増加している。また生産財のなかでは、引き続き鉄鋼の伸びが著しい。

11月中の鋳工業出荷は、前月比+2.1%と、これまで順調な伸びを続けている。その内容はほぼ生産に見合っているが、とくに耐久消費財の増加が目立つ。

メーカー製品在庫は、11月も+0.9%と、ゆるやかな増勢を続けている。機械が引き続き増加しているが、鉄鋼は、出荷好調のため当月は減少している。

10月のメーカー原材料在庫は、輸入素原材料が前月著増のあと減少となったが、国産製品原材料が鋼材および織物手当を中心に大幅増加をみたため、全体としては依然増加している。ただし生産上昇のテンポが速いため、在庫率は大勢横ばいぎみである。

預金準備率引上げなどによって、業界にも次第に警戒人氣がみられはじめているが、それもばく然たるものにとどまっているのが現状とみられる。いまのところ、早急に生産、設備投資について、計画を練り直そうとする空気は醸成されていない。銀行の貸出態度その他、情勢の推移を待つ気分が強い。

機械受注(海運を除く民需)は、10月には前月の大口受注集中の反動で若干減少したが、ならしてみれば漸増傾向には変わらない。とくに当月は、石油精製、紙・パルプ、造船、建設などからの発注が目立った。

高水準の銀行貸出続く

11月は、商取引の活発化もあって、銀行券がかなりの増発となったが、財政収支面では、遅れていた供米代金の支払進捗などもあって、銀行券の増発を大幅に上回る払超となった。こうした情勢に応じ、本行の保有債券の売戻しが行なわれたほか、貸出面でもかなりの回収がなされた。コール市場には、年末接近につれて引き締めまり感が強まり、レートも、長期物を中心に次第に堅調となってきた。

全国銀行貸出は、11月も引き続き高水準の伸びを示した。内容的には、当月は季節的に決算資金がふえたが、その他では引き続き好調産業、中小企業などに対する運転資金が増加している。なかでも、売込み競争の激化に伴うものが依然として強い。

こうした貸出にささえられて、企業金の繰りは総じて平穩に推移している。中小企業金融にも、当面大きな問題はない。銀行の中小企業向け貸出にまだ抑制傾向がみられず、また中小金融機関の資金繰りも概して余裕を失っていないためである。ただ下請企業などでは、決済条件が多少悪化しており、金繰りが次第に窮屈化するきざしもある。

預金準備率引上げなど、引締め方針の明確化を背景として、株式市況は一段と低迷を深めつつある。銀行の貸出態度には、慎重化の気配が底流にあるが、情勢待ちの気分も見受けられる。少なくとも、先行き貸出増勢の鈍化をもたらすところまで、はっきり変化が生じたとはいえない。